

和歌の修辞法の翻訳に関する考察と実践  
 ——百人一首のフランス語訳を対象として——

A study and practice on the translation of waka rhetoric :  
 For the French translation of the Hyakunin-Isshu

Hiromi Iizuka  
 飯塚ひろみ

要 旨

本稿は、和歌を翻訳する際に必ず直面する修辞法のうち、枕詞・掛詞・縁語・同音反復について、百人一首のフランス語訳を対象として論じたものである。それぞれの修辞法を含む歌を百人一首歌の中から5首取り上げ、先行する4種類のフランス訳における手法を考察し、さらに稿者によるフランス語訳の実践を試みた。結果として、先行訳については、枕詞の直訳的な翻訳が歌意を損ねる結果になっていることや、掛詞や縁語へのこだわりがそれほど顕著でなかったことなどが明らかになった。稿者の実践では、修辞法を意識しつつ、リズムにもこだわった翻訳を試みる過程において、翻訳の際に日本語の音を再現することの可能性や和歌の型（5-7-5-7-7）の保持の是非について考えるきっかけを得、より良いフランス語訳をするための方法を探ることができた。百人一首のさらなる世界への広まりに有意義な実践であったと考える。

なお、考察・翻訳実践対象としたのは、3番歌「足引きの」・9番歌「花の色は」・27番歌「みかの原」・55番歌「滝の音は」・60番歌「大江山」の5首である。

キーワード：百人一首・翻訳・フランス語・仏訳・修辞法・掛詞・縁語・同音反復・枕詞

はじめに

和歌を翻訳する際、枕詞・掛詞・縁語・同音反復のような独特の修辞法をいかに訳

出するかといった問題に必ず直面する。本稿では、百人一首のフランス語訳（以下「仏訳」）におけるそれらの問題について、5種類の訳を比較しながら考察する<sup>1</sup>。

対象とする仏訳は、Revon 訳<sup>2</sup> (a)、Renondeau 訳<sup>3</sup> (b)、Nakamura et Ceccatty 訳<sup>4</sup> (c)、Sieffert 訳<sup>5</sup> (d) の4者の訳（本稿では「先行訳」と呼ぶ。aとbについては百人一首としてのまとまった訳ではないため、訳がないものもある）、および今回試みに実践した稿者による訳 (e) である。

## 1. 枕詞

足引きの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

(3 番歌 柿本人麻呂、拾遺集 778 恋三)

a	Durant cette nuit longue, longue Comme la <u>queue tombante</u> Du faisan doré <u>Qui traîne ses pas,</u> Dois-je dormir solitaire?	この長い長い夜の間中 <u>垂れ下がる尾</u> のように 金の雉の <u>足を引きずる</u> 私は孤独に寝なければならないのか？
c	Comme le faisan dans les monts sombres <u>effile et incline sa longue queue</u> Pourquoi dois-je tout seul m'endormir dans la longue nuit?	暗い山々の中でその <u>長い尾</u> を細く傾けて いる雉のように なぜ私はたったひとりで長い夜の中で眠 らなければならないのか？
d	Autant que la <u>queue</u> <u>queue traînante</u> de l'oiseau des âpres montagnes longue longue cette nuit dormirai-je solitaire	尾と同じくらい 鳥の <u>引きずられた尾</u> 険しい山々の 長い長いこの夜 私は孤独に寝るのだろうか
e	Comme la longue queue de l'oiseau de la montagne La longue nuit si longue dormirai-je seul	長い尾と同様に 山の鳥の 長い長い夜 私は一人で寝るのだろうか

表では、フランス語と日本語が対応しやすいように、文のまとまりでなく訳の改行ごとに日本語を付与したが、自然な日本語訳にすればそれぞれ以下のとおりとなる(cはほぼ変わらないので除く)。

- a この長い長い夜の間中 足を引きずる金の雉の垂れ下がる尾のように  
私は孤独に寝なければならないのか？

d 険しい山の鳥の引きずられた尾と同じくらい長い長いこの夜を

私は孤独に寝るのだろうか

e 山の鳥の長い尾のように長い長い夜に私は一人で寝るのだろうか

まず、先行訳について確認する。本稿が対象とするこの歌の修辞としては、枕詞（「山」にかかる「足引きの」）がある。aは、枕詞「足引きの」が訳出されていると考えられるが、直訳風に「足を引きずる」となっているので、かえって歌が分かりにくくなっている。また、せっかく枕詞を訳出したにもかかわらず、肝心の「山」に当たる語がない。他に、dも「足引き」の「引」が意識されているとみられる。

序詞の部分は、先行訳ともに「しだり尾」を意識した形容があり、中でもdは原歌の「山鳥の尾のしだり尾の」に忠実に「queue」（尾）を二度重ねている。

修辞以外では、「山鳥」をaとcが「faisan」（キジ）とし、dが「oiseau」（一般的な鳥）としている。「長々し夜」は、aとdが「longue」（長い）の繰り返しで再現している。

eの拙訳においては、枕詞「足引きの」は訳出しなかった。aのようにかえってわかりにくくなると考えたからである。「しだり尾」はシンプルに「La longue queue」（長い尾）とした。「山鳥」は調べの美しさを求め「l'oiseau de la montagne [lwa-zo-d (a) -la-mõ-tap]」（山の鳥）とした。

## 2. 掛詞

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に

(9 番歌 小野小町、古今集 113 春下)

a	La couleur de la fleur S'est évanouie, Tandis que je <u>contemplais</u> Vainement <u>Le passage de ma personne</u> en ce monde	花の色 消え去った <u>瞑想していた間に</u> むなしく この世での <u>私の身の移ろい</u>
b	La couleur des fleurs S'est fanée, hélas! Tandis que, le <u>regard</u> perdu, Je pense à <u>la fuite de mes jours</u> Dans la nuit où <u>il pleut sans fin</u>	花々の色 色あせた、ああ！ その間に、失われた目線、 <u>私の日々が流れ去るのを考えている</u> <u>止むことなく雨が降る夜の中で</u>

c	La couleur des fleurs se metamorphose au rythme moqueur Des jours et des choses <u>sous mes yeux</u> enfuis au bruit de <u>la pluie</u> .	あざけるようなペースで花々の色は変貌する 私の目に <u>映る</u> 日々や物事は <u>雨</u> の音に消え去った
d	La couleur des fleurs a fini par s'altérer sous <u>les longues pluies</u> cependant qu' <u>au fil de temps</u> vraiment je me morfonds	花々の色 変質によって終わった <u>長い雨</u> の下で <u>時間が経つ</u> 間に 私は本当に待ちくたびれている
e	La couleur des fleurs et puis celle de ma vie avaient passé en vain Sous <u>la pluie continuelle</u> Pendant que j' <u>errais</u> dans ce monde éphémère	花々の色 私の人生それ（色）も むなしく過ぎていた <u>降り続く雨</u> の下で <u>私</u> が <u>さまよっていた</u> 間に このはかない世の中で

まず、上の句について確認する。初句「花の色は」については、aのみが「La couleur de la fleur」と「花」を単数形とし、他はすべて複数形である。この歌の「花」は通常「桜」と解釈されているので、複数形とするのがよりよいであろう。

二句「うつりにけりな」については、先行訳はそれぞれ「évanouie」（消え去った）、「fanée」（色あせた）、「se metamorphose」（変貌する）、「s'altérer」（変質すること）と異なる語が用いられている。「うつりにけりな」は「色あせてしまった」と現代語訳されることも多いが、対象を桜とするならば、「色あせた」よりも「散った」のほうがよさそうである<sup>6</sup>。拙訳では、空間移動と時間経過をあわせもつ「passer」（移る、過ぎる）を用い、「うつりにけりな」という感嘆表現のニュアンスを出すために大過去（avaient passé、過ぎてしまっていた）とした。また、先行訳は「花の色は」の後にすぐその変容したさまを続けているが、拙訳では「et puis celle de ma vie」（私の人生の色も）と原歌にはない説明的な訳をあえて加えた。できるだけ註釈なしに原歌が理解できるようにとの理由もあるが、この歌についてはフランス詩の形式に近づける試みをしたためでもある。具体的には、男性韻と女性韻を交互に置く交差韻（rimes croisées）とし、2行目・4行目・6行目に女性韻（vie, continuelle, éphémère）を置いた。

次に、下の句を見る。下の句には「ふる」（「降る」と「経る」）、「ながめ」（「長雨」

と「眺め」の二つの掛詞が存在する。即ち、自分の身が世に長らえることと雨が降ること、雨が長く続くことと物思いをすることであるが、この二つの掛詞が「花」のことと「我が身」のことの二重の文脈を作り出しているため、その点も考慮する必要がある。

先行訳を見ると、aには「眺め」と「経る」のみあり、雨が存在しない。bは掛詞の要素はすべて訳出されているものの、「眺め」に相当する部分がややわかりにくい。「le regard perdu」（失われた目線）とあるので、おそらく詠み手の目線でなく、詠み手に注目しなくなった他者の目線であろう。bで面白いのが、意図的かどうかわからないが「夜」（la nuit）という語の使用によって、「世」と「夜」の掛詞的要素が創出されていることだ。cは「眺め」と「雨」があるが、「長雨」となっていない。dは「長雨」と「経る」が明確であるものの、「眺め」がわかりにくい。相当するのは「morfonds」（不定形は monfondre）であろうが、語意は「待ちくたびれる、不安にかられる」なのでややそぐわないように感じられる。拙訳においては、「眺め」について、先行訳のような「見る」の度合いが強い表現ではなく、さまようことや考えなどが定まらない様子を表す語である「errer」（訳では半過去 errais に活用）を用いた。「降る」と「長雨」は「la pluie continuelle」（降り続く雨）に集約し、「経る」は直接的には訳出しなかったが、上の句の「passé」（過ぎる）にその意を含ませている。

上記により、掛詞について、その両義が訳出される場合とされない場合があることが確認された。しかし、いずれにしてもその両義を訳出したところで、その訳語を同音にすることは相当に困難だといえる。英訳においては「松」と「待つ」の両方を表すことのできる訳語として「pine」が発見されているが、果たしてフランス語でもそのような語が見つかるだろうか。さらなる探究が必要となろう。

### 3. 同音反復＋掛詞

みかの原わきて流れる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ

(27 番歌 中納言兼輔、新古今集 996 恋一)

a	Sur la plaine de Mika, <u>Jaillissant</u> et courant, Le torrent d'Isoumi. «Quand l'ai-je vue? me dis-je. Et pourquoi Pensé-je si tendrement à elle?»	Mika の平野の上に <u>湧き出て</u> 流れている Isoumi の早瀬 彼女をいつ見た? 自問する なぜ 彼女をこれほど恋しく思ったのだ?
c	Comme <u>jaillit</u> et coule dans le champ de Mika le fleuve <u>Source</u> Quand l'ai-je vu, pour éprouver un tel amour?	Mika の野の中に <u>湧き出て</u> 流れるような <u>Source</u> 川 これほどの愛を感じるために、いつ私は 彼を見たのだろうか?
d	Les eaux de la souce qui par les Champs de Mika <u>jaillissent</u> et coulent quand les ai-je bien pu voir pour les désirer autant	泉の水 Champs de Mika に <u>湧き出て</u> 流れる いつ私はそれらを見ることができたのか こんなに多くそれらを望むために
e	La rivière Itsumi qui <u>jaillit</u> et qui <u>sépare</u> la prairie de Mika C'est le cours d'une <u>source</u> La <u>source</u> de mon coeur à qui vous manque Mais je ne sais pas quand on s'est vus	<u>湧き出す</u> Itsumi 川 Mika の平原を <u>分けて</u> それは泉からの流れ あなたを恋しく思う私の心の <u>源泉</u> しかしいつ見たのかわからない

この歌では、同音反復の「いつみ」と掛詞「わく」（「湧く」と「分く」）訳出が問題となる<sup>8</sup>。

前節に見た掛詞の音の再現の困難さに似通う問題でもあるが、同音反復の「いつみ」について、フランス語でその音を再現することもまた困難である。先行訳でも「i-tsu-mi」の音は反復されていない。拙訳 e においても「いつみ」を音で反復することはあきらめ、代わりに訳語の「source」（泉、源泉）を反復させた。4行目の「source」は「泉川の源流」として、5行目のそれは「湧きあがる思いの原因」として用いた。「source」に関わる語についても「cours [ku:r]」（流れ、「coeur [koe:r]」（心）と音の響きを合わせて同音反復の要素を強めた。また、これは言葉遊びのレヴェルであるが、1行目で泉川を清音の「Itsumi」とし、その後に関係代名詞「qui [ki]」を置き、原歌の下の方「いつみき」の音を再現している。掛詞「わく」については、先行訳はすべて「湧く」のみの訳出であるが、拙訳では、「湧く」（jaillir）と「分ける」（séparer）の両方を訳出した。

また、修辞には関わらないが、当該歌は新古今集では藤原兼輔の歌となっているも

の、実際には読み人知らずのようである。したがって「見た」相手を必ず女性としなければならないわけではない。この点を見ると、aの相手は「彼女」、cは「彼」(l'ai-je vu の「vu」は男性形)であり、dは複数形 (les) が用いられているので「見た」対象が人ではなく泉川とみかの原となりそうだ。拙訳では意図的に性別を特定しなかった。

#### 4. 縁 語

滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ

(55 番歌 大納言公任、千載集 1035 雑上)

a	Bien que, Depuis longtemps, ait <u>cessé</u> <u>Le bruit de la cascade</u> , Son nom a <u>coulé</u> si loin Qu'on l' <u>entend</u> encore.	それにもかかわらず ずっと前に <u>止んだ</u> 滝の音 その名はとても遠く流れた 私たちがまだそれを <u>聞く</u> ほど
b	<u>Le bruit de la cascade</u> Depuis bien longtemps S'est <u>tu</u> , Mais sa célébrité s'est perpétuée Et l'on parle toujours d'elle	滝の音 ずっと前に <u>聞こえ</u> なくなった しかしその名声は続いてきた そしていまもそれを話題にする
c	<u>Le fracas de la cascade</u> est depuis longtemps <u>évanoui</u> Ne reste qu'un nom dont on <u>entend</u> mur- murer <u>le cours</u> .	滝の激しい音はずっと前に <u>消えた</u>  流れが音を立てるのが <u>聞こえる</u> 名前だけ が残っている
d	Voilà bien longtemps que <u>le bruit de la cascade</u> s'est <u>interrompu</u> seul son renom jusqu'à nous a suivi <u>le cours</u> du temps	とても長い時間になる 滝の音が <u>中断して</u> (から) 私たちまでのその名声だけが 時の <u>流れ</u> についてきた
e	<u>Le son de la cascade</u> a <u>disparu</u> depuis longtemps Mais son renom <u>résonne</u> encore au <u>fil du temps</u>	滝の音 ずっと前に消えた しかしその名声は <u>鳴り響</u> いている 時の <u>流れ</u> の中でまだ

この歌には異伝があり、初句を「滝の糸は」とするものもある。その場合、出典は「拾遺集 449、雑上」となる。先行訳がすべて「音」を訳出していることもあり、本

稿では「滝の音は」として扱う。「滝」の縁語として「音」「絶え」「流れ」「聞こえ」がある。a と c はすべての縁語が訳出されている。b は「tu」（原形は taire）の一語で「絶える」と「聞こえなくなる」の意を担い、「流れ」がない。d は「聞こえ」がない。

縁語の他には特に修辞はないが、この歌は各句の初めの音「た」と「な」の重なりが特徴で、これゆえに美しい調べを作り出しているといえる。拙訳ではこのことを意識して語を選んだ。まず、「音」の訳語について先行訳を見ると、c が「fracas [fra-ka]」、他が「bruit [brɥi]」であり、「k」「b」とやや強い音が入る。意味上では「fracas」は「激しい音」となるので、イメージする音が強くなる。「bruit」は「騒音」なども含む多種類の音を表す語である。拙訳 e では「son」を選んだ。楽器の音などの「響き」を表す語である。「聞こえ」には「son」の関連語「résonne」（鳴り響く）を用い、縁語関係を強めた。

他の縁語については、原歌では「名」が「流れ」るのであるが、拙訳ではあえて「時の流れ」（fil du temps）とした。なぜなら、「fil du temps」の中にある「fil」は「糸」の意を持つので、異伝の「滝の糸は」とも縁語的關係を持たせることができるからだ。「絶えて」を「disparu」（消えた）としたのも、「糸」との關係にある。滝の流れを「糸」に見立てた場合、それが「絶え」ということは、「見えなくなる」ということである。よって、視覚表現の要素も持ち合わせるこの語を選んだ。

## 5. 掛詞+縁語

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

(60 番歌 小式部内侍、金葉集 550 雑上)

a	Par le mont Oé La route d' <u>Ikuno</u> Etant si lointaine, Je n'ai encore ni <u>foulé</u> ni vu (vu aucune <u>lettre</u> )	Oé 山を通して <u>Ikuno</u> の道 とても遠い 私はまだ <u>踏ん</u> でも見てもいない ( <u>手紙</u> もまったく見ていない)
c	Déjà la route est si longue jusqu'au mont Oé et jusqu'à <u>Ikuno</u> Que je n'ai pas <u>mis le pied</u> à Amabohasi- daté et n'a pas vu de <u>lettre</u> .	Oé 山までと <u>Ikuno</u> までの道はとても長い だから私は Amanohashidaté に <u>足を置</u> いていないし、 <u>手紙</u> も見えていない



d	Par les monts d'Oé si lointain est le chemin des champs d'Ikuno que jamais je n'ai foulé le fameux Pont-du-Ciel	Oéの山々を通して とても遠いのは道のり Ikunoの野の だから私は一度も <u>踏んで</u> いない 有名な空の橋を
e	Passer sur le mont Oé <u>Aller</u> dans le champ Ikuno C'est un long chemin vers Amanohashidaté Je ne vais donc pas encore <u>mettre</u> les pieds sur ce pont de mer et ne vois pas <u>lettre</u> de ma mère	Oé山の上を通ること Ikuno野の中を <u>行く</u> こと それは天の橋立までの長い道のり だから私はまだ <u>置く</u> つもりはない 足をその海の橋の上に 母の <u>手紙</u> も見ない

この歌には、「大江山」「生野」「天の橋立」と3つの地名が詠み込まれている。京から大江山を越え、生野を通過し、天の橋立を踏むという順序であるので、その地理感覚が重要となる。

まず、各訳を整理しよう。

a 大江山を通るととても遠い生野の道

私はまだ踏んでいないし見てもいない（手紙もまったく見ていない）

c 大江山までと生野までの道はとても長い

だから私は天橋立を踏んでいないし手紙も見っていない

d とても遠い大江の山々のそばを通る生野の道

だから私は有名な空の橋を一度も踏んでいない

e 大江山を越えて生野の野に行く それは天の橋立への長い道のりだ

だから私はその海の橋を踏むつもりはないし 母の手紙も見ない

aは生野の道という長いルート途中に大江山があるイメージである。到着地としての天橋立が訳出されておらず、cでは大江山と生野が同レベルで並列され、これらと「天の橋立」との地理関係が不明瞭である。dはaに近いが、山と野が複数形なので地名が漠然としてしまう。「天の橋立」は「Pont-du-Ciel」（天の橋）と訳出され、地名としての機能が消失している。cと同様に地理関係も分かりにくい。

次に、「いく」（「生野」と「行く」）と「ふみ」（「踏み」と「文」（手紙））の二つの掛詞について見る。先行訳ともに「行く」は意識されていないようだ。「ふみ」については、aが「fouler」（踏む）と「lettre」（手紙）、cが「mis le pied」（足を置く）と

「lettre」、d は「fouler」のみで「文」はない。また、「踏み」は「橋」の縁語でもあるため、訳では「踏む」対象を「橋」とする必要がある。この点を見ると、「踏む」対象は a が「生野の道」、c が「天の橋立」、d が「有名な空の橋」(＝天の橋立)となっている。

上記を念頭に置きつつ、拙訳について述べる。掛詞「いく」については、「Aller」(行く)を「Ikuno」と同じ行に置いて強調した。「ふみ」は「mettre les pieds」(足を置く)で「踏む」とした。先行訳 c と同じ発想であるが、「mettre [mɛtr]」を不定形のまま用いることにこだわったのは、もう一方の意の「文」(手紙)の訳語である「lettre [lɛtr]」と音を近づけるためである。その操作のために、「まだふみもみず」の翻訳が「踏んでいない」でなく、「踏むつもりはない」となったが、原意を大きく損ねてはいないはずである。

また、「天の橋立」について、3行目の地名そのままの「Amanohashidaté」を5行目で「pont de mer」に言い換えた。地名だけでは想像できない風景を呼び起こすとともに、「踏み」と「橋」(pont)の縁語関係を可視化するねらいである。先行訳 d のように「Pont-du-Ciel」(天の橋)も考えたが、漢字からの連想よりも実景を取った。表現上「天の橋立」が「海の橋立」に変容してしまったが、結果として「mer [mɛ:r]」(海)と「mère [mɛ:r]」(母)という同音の響きを得ることができた<sup>9</sup>。

### 翻訳の実践を試みて

以上、和歌の修辞法に対するフランス語訳について、これまでどのような方法が取られてきたのかを先行訳において確認し、今後どのような方法を取り得るのかを稿者の試訳において模索した。先行訳においては、枕詞の訳出が歌意を損ねる結果になっていることや、掛詞や縁語へのこだわりがあまり顕著でなかったことなどが指摘できる。稿者の実践からは、同音反復で日本語の音をそのまま再現することや掛詞の両義を訳出する際に完全に音が一致する仏語を見つけることの困難さを実感した。しかしながら、「ふみ」の掛詞として「mettre」「lettre」と同音に近いものを見つけたことは有意義であったと考える。

また、先行訳は和歌の型に従い5行書きや2行書きとしており、Sieffert 訳 (d) においてはさらに音節を5-7-5-7-7に整えているが、拙訳では行数や音節をあえて定めなかった。それらに縛られるがゆえに不自然な訳になることを極力避けるためであ

る。結果として、歌により4行・5行・6行とヴォリュームが不揃いな訳になったが、一方で、和歌の型から解き放たれた訳の創出の種を蒔いたともいえる。和歌の型からフランス詩の型へと、型の変容も含めた翻訳があってもよいだろう。本稿における訳はまだまだ途上のものであるが、今回の実践の過程で得られた発想や工夫を取り入れ、盛り込む要素を取捨しつつ完成を目指したい。

### 注

- 1 百人一首歌のフランス語訳における問題については、ジャクリヌ・ピジョー氏の論考「翻訳の問題—百人一首の仏訳英訳をめぐる—」（『比較文化』31-2、東京女子大学比較文化研究所1985.3）がある。
- 2 Revon Michel 『ANTHOLOGIE DE LA LITTÉRATURE JAPONAISE』（Delagrave 1910）
- 3 G. Renondeau 『Anthologie de la poésie japonaise classique』（Gallimard 1971）
- 4 Ryoji Nakamura et René de Ceccatty 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』（Edition Philippe 2005）※ 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』（édition de la Différence 1982）の第三版
- 5 René Sieffert 『De cent poètes un poème』（Publications Orientalistes de France 1993）
- 6 吉海直人氏『百人一首の正体』（角川文庫、2016）pp.156-157に「移る」は原則として空間移動であり、当該歌が古今集の落花の歌群にあることから、変色ではなく散ることであるとの指摘がある。
- 7 百人一首歌の掛詞の問題については、英訳およびハンガリー語訳を対象としたカーロイ・オルショヤ氏の論考「掛詞の翻訳の問題・「さよふけて」をめぐる：『百人一首』翻訳論（その2）」（『同志社女子大学日本語日本文学』29号、同志社女子大学日本語日文学会2017.6）がある。
- 8 翻訳における同音反復の技法については、英訳とドイツ語訳およびハンガリー語訳を対象としたフィットレル・アーロン氏の「同音反復式の序詞の翻訳に関する一考察—『古今集』と『新古今集』と『百人一首』歌を例に—」（『人文』16号、学習院大学人文科学研究所、2016.3）に詳しい考察がある。
- 9 なお、吉海直人氏は「百人一首「大江山」の再検討—歌枕の技法に注目して」（『古代文学研究 第二次』28号、古代文学研究会、2019.10）において、「天橋

立」が中世に「海橋立」と表記された例を引き、「天」と「海人」「海」の掛詞の可能性に触れつつ、「中世に天に通じる「天の橋」（垂直）を「海の橋」（水平）に捉えなおしていたのであろう」と述べている。同論にはほかにも地名の認定や掛詞の是非についての興味深い考察がある。

## 付記

本稿を成すにあたりフランス語訳の音韻や解釈についてご助言くださった京都フランス語教室「游藝舎」の先生方に感謝申し上げます。